

# 季刊 ジャネット Ja-Net

No.16

2001年1月25日発行

View from the Other Side .....	3
あちこち日本語ご紹介[ 栃木県宇都宮市 ].....	4
あちこち日本語ご紹介[ キルギス ].....	5
教材紹介『みんなの日本語 初級で読めるトピック25』.....	6
『みんなの日本語 書いて覚える文型練習帳』.....	7
なんでも情報BOX .....	8

Ja-NetはJapanese Networkの略です。「[こほんご]を通して編集室と読者の皆様を結ぶ情報誌にしたいと考えています。

スリーイーネットワーク

## 巻頭寄稿

# 教師養成のあれこれ

桜美林大学大学院教授  
J.V.ネウストブニー



### 教師の由来

教授能力の由来は、複数のパターンによるが、その一つは、たしかに自然習得である。このようなことを書くと、S.F.クラシェンの理論を思い出す。クラシェンがかつて主張したのは、言語が主として無意識的で自然な「習得」(acquisition)によって獲得され、意識的で人工的な「学習」(learning)のおかげで身に付くものではないということである。むろん、私たちが現在クラシェンが教えていたすべてのことを信じているわけではないが、やはりクラシェンの時代まで考慮されなかったこと、つまり言語の無意識的な「習得」のプロセスがあるという示唆は、重要な意味を持っていたし、現在も持っている。なぜなら、近代社会において「教育」、「訓練」、「養成」などがさかぶる崇拜されていたからである。

なお、この教えを文化のほかの領域、とりわけ教授能力の獲得に適用すると(ネウストブニー1995第6章参照)、教師も教授ストラテジーのインプットがあれば、ごく自然に、無意識のうちに教師になる、つまり教授能力を「習得する」という考え方がありうる。なるほど。ここに伝統的な「教師養成なしの養成」を裏付ける理論があるのだろうか。しかし、さきにも言ったように、私たちはクラシェンの理論を無条件に受け入れる必要はない。言語が教室でも獲得されるのと同じように、他の文化の場合も明らかにクラシェンの意味の「学習」(learning)がある。教授能力の場合にも、実践に基づく「習得」もあれば、意識的なフォーマルな「学習」による獲得もあるに違いない。

### 教師の多様性

ところで、教師はすべて同じ類のものではない。だから、同じ「教師訓練」を受けるのはおかしい。現在の日本語教育では「多様化」は神聖なものになり、マジック・ワードになったと

さえ言えるかもしれない。しかし、この多様化は教師養成には適用されないのが普通である。教師養成では私たちは一種の画一的な「教師」を目標にしているのではないだろうか。

「教師」といっても、本当に重要なのは、狭い意味での「教師」ではなく、いわゆる「教授者」(ネウストブニー1998)である。「教授者」の中にはもちろんまず「教師」が入る。しかし、次に「ボランティア」が含まれる。ボランティアをどう「養成」すべきかについて私たちは考えるべきであろう。つまり、ボランティアの中に伝統的な教師になりたい人がいるが、それだと、折角のボランティアのよさが失われる可能性がある。要求される知識も異なる。というのは、養成のために無制限に時間が使えたら、すべての教授者にありとあらゆる知識や能力を持たせていいが、使用できる時間が限られているので、養成プログラムの多様化、専門化をなおさら慎重に考える必要がある。たとえば、ボランティアには広範な文法の知識は必要ではないだろう。その代わりに、コミュニケーションの理解と、日常生活で外国人をどう支援できるかという知識は欠かせない。教師養成の科目の選択も内容も当然変わる。

また「教授者」にはT A (Teaching Assistant)のように将来の日本語教育にとって中心的なカテゴリも属している。この場合にも、「教師」として育てていくと、T Aのよさが失われる可能性がある。外国の日本語教室では、これから教師を日本から供給するだろうという楽観的な考え方もあるが、海外で日本語教師がもっとも不足している初等中等教育では将来それぞれの国の教師が主導権をとり、言葉のモデルとしては日本人のT Aに参加してもらおうということで落ち着くだろうと思われる。しかし、このようなT Aは継続する職業になりそうもないので、流動性が大きく、かなりの数の人を養成する必要があるだろう。この制約から見ても、教師とT Aの養成過程が当然違うべきである。

## 海外との連携

教師養成についても一つ中心的な問題は、海外との連携である。すでに触れたように、教師の問題は海外へ教師を「輸出」すべきだという考え方は片付けられない。それよりは、海外における教師養成が広範な事業になるだろうと思われる。海外にはすでに日本語教師養成のプログラムがあり、私も1980年代にオーストラリアのモナシュ大学で中ぐらいのプログラムを担い、多くの教師（中高等学校と大学）と「メタ教授者」（教師を養成する人）を育てた。（ちなみに、これは多様化に手の回らない「教師一般」のものであった。）しかし、その後、オーストラリアのあちこちで、中高等学校の教師を養成する大学院レベルのプログラムの中で、日本語教師の専攻ができた。これはかなり厳密で一年間のコースで、実習たっぷり、そして最近の応用言語学が盛り沢山のプログラムである。

海外での「メタ教授者」は日本の教師養成プログラムについて現在充分の情報を持っているとは言えない。また、日本で日本語教師養成を担当している「メタ教授者」は、海外の新しいプログラムについて情報を得る必要がある。完全なものではないが、一つの可能性を現実にしようとしている試みである。特に、自分自身の卒業生を海外で日本語教育に従事させようとしている方は、日本の知識詰め込みのメニューと海外のよりリラックスしたメニューを比べることに役立つだろう。中には注目しにくいものもあるだろうが、日本の教師養成のプログラムと比較し、何かの意味のためになるものもあるかもしれない。

海外との連携はもう一つの意味で考えるべきであろう。つまり、海外では在職教師のための研修が積極的に行われる（たとえば、ス Pens ンス-ブラウン1999参照）。これは何も日本語教師だけの特徴ではなく、教師一般のことである。つまり、教師はいったん教師免許証を取ったら、それで一生安心していられるかという問題がある。教育界の共通の知識が早く変わり、進歩が激しい。これに何とか歩調を合せるのは教師である。海外の一部には日本語教師を含む「在職者研修」はかなり多い。この点では、日本には新しい発展が全く見られないわけではないが、まだ習うところもあろうと言えるのではないだろうか。

## 教師養成と教育経験

教師養成には、教師経験は不可欠な成分である。これは養成者の数から見て、無理な要求だと思っている人がいるが、私たちはそう簡単に譲歩しなくていいのではないだろうか。海外でも、養成者を受け入れてくれる学校や教師を探すのは大変なことである。しかし、教育経験のやや基礎的な形態は、かなり簡単にできる。つまり、記録を使って、教室行動を分析することは、記録を手に入れさえすれば、大いに役に立つ。また、養成者を小さなグループに分け、静かに授業を参観させることもできる。教師としてではなく、TAとしての経験を持たせる機会を作るのは、メタ教授者にとっては難しい課題かもしれないが、不可能なことではない。なお、教師として教室に立つ機会は、すべての養成者の場合に必要なものではなく、すでに高い

レベルに達した人だけに当てはまる問題であり、これも考えられてきたほどの大変なことではないかもしれない。

文法外コミュニケーション・社会文化能力を指導できる教師をかつてオーストラリアで中高等学校の教師にコミュニケーションやインターアクション能力をもうすこしコースに取り入れないかと勧めたときに、彼らは一斉に「先生、私たち自身も何も知らないことだ」と反発した。本当だったろう。非母語話者と母語話者が共有する問題である。日本の歴史を知り、文学を読んで、花を生けることと無関係の課題である。日本語教師の中で、答えを持っていないにしろ、コミュニケーションやインターアクションの問題範囲を示すだけでもできる日本語教師はどれだけいるだろうか。

ここにおそらく将来の日本語教師養成の最も大きな障害物があり、まずそれを超えなければならない。日本語教育はいつまでも「文法主義」のままに続くのではないだろうと思われるから。

## <参考文献>

- ネウストブニー、J.V.(1995)『新しい日本語教育のために』大修館書店  
 ネウストブニー、J.V.(1998)「教授者とネットワーク」『日本語教育における教授者の行動ネットワークに関する調査研究 - 報告書』日本語教育学会、17 - 30頁  
 ス Pens ンス-ブラウン、R.(1999)「オーストラリア・メルボルンのハイスクールで教える日本語教師の職業ネットワークについて」『日本語教育における教授者の行動ネットワークに関する調査研究 事例研究』日本語教育学会、119 - 132頁

J.V.ネウストブニー (J.V. Neustupny)

桜美林大学大学院国際学研究所教授、日本語教育学会副会長。1933年ブラハ生まれ。1960-1962年東京大学文学部国語国文学科留学。1964年チェコスロバキア科学アカデミーより博士号取得。同アカデミー東洋研究所所員、モナシュ大学教授、大阪大学教授、千葉大学教授を歴任。

## VIEW FROM THE OTHER SIDE

## 外国人の「トモダチ」、日本人の「友達」

禹守根



先日、東京都の研修生として来日している南米の日系人達と食事をしている時、ペルー人の女性に「あなたは5年以上日本に住んでいるでしょう。日本人の友達がたくさん作ったの？寂しくないの？」という質問を受けた。唖然としている私に、ブラジル人がペルー人の質問をやさしく解説してくれた。「私は日本人の友達がなかなか作れなくて困っている。今のままなら寂しくて5年どころか1年も住みたくない」ということらしい。「回りの日本人はね、彼らの友達に私のことを“私の友達だ”と紹介してくれるけど、それは違うでしょう。友達ではなく知り合いでしょう。私にとって彼らはFriendではなくAcquaintanceよ」とペルー人女性は続けた。

彼女の話には私も同感である。1995年の来日以来、私は日本人との交流は勿論のこと、70カ国以上の留学生からなる組織の代表や、日本人青年と留学生との交流を図る組織にも参加するなど、いわゆる「異文化交流」に積極的な姿勢をとってきた。

その中で、私は日本人との付き合いの際の特有な一点（他の外国人との間ではあまり感じられない一点）について次第に気づいていた。それはまさにペルー人の彼女の質問と関わることなのだ。

どう考えても外国人の「トモダチ」というコンセプトと日本人のそれとの間には大きな「距離」があるようだ。友達同士の付き合いの深さ及び幅が、外国人同士の場合と日本人同士の場合では比較にならないほど違うのである。その結果、両者の違いを知っている人々の間には、前者は、より「濃い」、後者は、より「浅い」付き合いとして特徴付けられるのだ。

確かに、外国人が自分達の友達観で日本人との関係を築いていこうとすれば、多くの日本人は困った表情をする。または「失礼な...」「厚かましい」と相手が近付いてこれないような態度をとってしまう。友達といっても、付き合い上の「安全

線」を十分に確保しておく日本人からすれば、外国人の友達付き合いの仕方は、個人の領域にまで入りたがるようにみえて、戸惑ったり負担に思うのも無理もなからう。

生い立ちや環境の異なる他人同士が深い関係で付き合いするためには、少なからず、意見衝突や立場の対立など「険悪な状況」にも陥ったりする。しかし、そうするうちに、次第に相手のことが分かってくるのである。

ところが日本人は、このような試練を持とうともしない。単に明るい微笑みを浮かべながら上辺だけの話に留まる付き合いをしているように見えるのである。

この原因について私は、日本人との付き合いにおいて最も大きな壁の一つである、有名な「本音」と「建前」を含む様々な角度で考えてみた。しかし、未だにこれといった答えは出ていない。あるいは、島国の特徴かな、とも考えてみた。だがそれでもないらしい。私の周りには外国人の中にも、例えば、台湾、インドネシア、香港、シンガポール、スリランカなどから来日しているすばらしい「友達」が少なくないのではないかと。嗚呼、私の日本に対する勉強はまだまだ足りないんだ。

いや、頭を抱えるような話はやめよう。原因はともあれ、現状を受け止めようではないか。現在、日本には多くの外国人がいる。彼らと互いに心を打ち明けられる「友達」になれば、双方の世界は、もっと広がっていくに違いない。そのためには、どのようにしたらいいのであろうか。

異文化を背景としている人々と密度の濃い付き合いを望むなら、お互いに自分が強く握り締めている「従来の自分」から離れてみる必要があるだろう。相手を信頼するならば、相手がとる行動、相手から自然に出てくる言葉に対して、こちらの戸惑いによって相手も戸惑わないように、まず自分をもっと広げる心構えが要求されるのではないだろうか。

禹守根(ウ・スグン)

1967年韓国仁川生まれ。1995年仁荷大学政治外交科首席卒業。同年10月、日本政府文部省の国費留学生として来日。1996年慶応大学大学院法学研究科修士課程入学。現在同博士課程在籍、国際法専攻。



禹守根さんの著書を小社より発売しました。日本の若い世代に期待する熱いメッセージが伝わってくる一冊です。

たたかれる覚悟で書いた  
韓国人禹君から日本への直言

四六判 240頁 1,300円  
禹守根著



# あちこち日本語ご紹介

国内編



栃木県  
宇都宮市

## 地域での日本語支援者養成方法の新たな試み

宇都宮大学  
梅木由美子

### 地域の日本語支援者養成

1988年、私は栃木県宇都宮市にある宇都宮大学に着任しました。この頃から栃木県でも定住する外国人や帰国者が増加し始め、彼らの生活支援の一環として日本語教育が必要になり、自治体や国際交流団体による日本語支援者の育成が始まろうとしていました。私は着任後まもなく市内のコミュニティ講座での講師を務めましたが、その後近隣の小山や鹿沼市の民間国際交流団体や国際交流協会での日本語教授法の勉強会やセミナーが開講され始め、私は宇都宮大学の他の日本語教育担当教官や補講クラスの講師とともに指導をお引き受けする一方、大学の公開講座でも日本語教授法講座を何度か設け、地域の日本語支援者の養成に携わってきました。



テレビ会議システムを使って市民情報センターのマルチメディアホールから同センター内の別会場（マルチメディアルーム）の日本語クラスを見学

### 鹿沼市での日本語教授法セミナー

このような地域の日本語支援者養成の中で、私が発足当初から携わっているのは鹿沼市国際交流協会の日本語教授法セミナーです。セミナーが始まったのは1993年9月、内容は初心者対象で、日本語教育の概要とワークショップ的な実際の指導法の二つから成り、指導には大学

の教官2名があたりました。受講者は市内に住む一般の方々に、日本語教育経験者と未経験者が混在していました。その後セミナーは一時中断しましたが、1997年に再開、以後は毎年度開講、1999年からは初級セミナー修了者を対象とした中級も開講、初級・中級とも各10回、

受講者数は10名から20名、指導講師には宇都宮大学の補講クラスの講師3名が加わり、概要、授業計画、教材作成、練習法など多岐にわたって指導を行っています。

セミナーの開講時間は、平日の午後7時から8時半まで、会場は鹿沼市民情報センターという、1999年に新設された情報通信メディア環境の整った施設です。

今年度は教授法セミナーでこの最新の設備を活用することを考え、宇都宮大学と市民情報センターを結んでテレビ会議システムを利用したセッションを4回実施、遠隔指導という、情報化時代に相応しい、地域での日本語支援者養成方法の新たな展開を試みることができました。

鹿沼市の日本語教授法セミナーはただ継続するだけでなく、新たなことに挑戦するとともに、後で述べるように着実に日本語支援者を生み出しています。これは同市国際交流協会の主事である橋本知子さんという方が、セミナーの発足時から企画、実施、日本語クラスの運営にずっと携わってこられた、ということが大きいと思います。この方の優れた業務遂行能力と暖かいお人柄なくしてはありえなかっただろうと強く思います。



セミナーでの熱心な質疑応答の風景

### 日本語教授法セミナーの成果

これまでのセミナーの修了者数は延べ人数で120名余りです。その中から鹿沼市国際交流協会日本語教室、愛称KIFANYが結成され、現在では週に2回の市民情報センターでの日本語クラス、個人レッスンを実施しており、2001年には日本語テキスト作成の計画もあるようです。また、この他に市内には同セミナー修了者の方が主宰する日本語教室が二つ生まれているそうです。

受講者の方々は老若男女、職業も様々ですが、毎回意欲的で熱心な方が参加しており、その方々がセミナー終了後もその熱意を持ち続けて日本語支援者として活動を始めていることは指導講師の一人として嬉しく心強い限りです。そしてこの方々の中から日本語教授法セミナーの指導講師が生まれる日もそう遠くはないと確信しております。



テレビ会議システムによって大学から送られた画像を見ている受講生

# あちこち日本語ご紹介

## 海外編



キルギス共和国  
ビシュケク

中央アジアの高地、キルギス共和国の日本語事情

日本語講師  
萩原幸子

キルギスってどこにあるのかご存知ですか？初めて日本を訪れたキルギスのある学生は大きなショックを受けました。「どちらから」「キルギスです」「ああイギリス...」「いえ...」「あ、ギリシャ!」「いいえ、キルギスです」「え！キリギリス？はは...」。彼はこの話をモスクワで毎年開かれる全CIS日本語弁論大会（注1）で披露し会場を沸かせたのですが、心の片隅には複雑な思いが全くなかったとは言い切れなんでしょう。「ある朝目が覚めたら、私の国は世界一の大国ソ連から誰も知らない小国キルギスになっていた」とは当時まだ子供だった若者たちの独立の実感だったのかもしれませんが。弁論大会では、彼は同時に自分も国名さえ知らなかった国の若者たちと日本語を通して交流できた（注2）感激を熱っぽく語って入賞しました。



ビシュケクから望む天山の山々

地図をお広げ下さい。大半の地図のまん真ん中、中央アジアの高地にキルギス共和国があります。国内のどこからでも白雪を抱く5000m級の天山の山々が間近に望めます。人口約450万、北の隣国カザフスタンとの国境近くにある首都ビシュケクに75万人以上の人が集まっています。日本からの調査団がよく訪れる大国カザフスタンのようには天然資源に恵まれず、観光客で賑わう西の隣国ウズベキスタンほどには訪れる人も多くありません。東の隣国中国を初め近隣のトルコ、

パキスタンの品々がバザールに溢れ、南のタジキスタンからは内戦の難民が山を越えてやって来ました。1999年夏キルギス南部バトケン地区で発生した日本人技師拉致事件をご記憶の方もおいででしょう。

そうした国で「日本語を勉強する人がいるんですか」とよく聞かれます。ええ、勿論。2000年7月現在公的機関で勉強している人だけで700名位。新学期を迎えた9月からはもっと増えているはずです。日本語専攻の学科が置かれている大学が3校（学部は5年制うち1校は1998年開校で現在3年生まで）、中の一つキルギス国立民族大学では専攻学科の外に国際関係学部・歴史学部・コンピューター学科などでも日本語を教えていますし、この外3校の大学に日本語コースがあります。中等教育レベルではまだあまり普及しているとは言えませんが、独立直後の1991年からコースを置いている学校（11年制）もあり、英語やドイツ語、トルコ語などと並んで日本語を置くところも出てきました。

この外に1995年以来筆者が5年間在任したキルギス日本センターの日本語講座があります。同センターは両国政府の合意に基づき、セミナー等を中心にキルギス共和国の市場経済化に資する人材を育成するため同年5月にオープンしました。従って対象は一般社会人ですが、日本に深い関心を持ち、将来仕事に役立てたいと考える非日本語専攻大学生・専門学校生も含まれます。0から出発し、毎年レベルを増やして現在初級・（のみ2クラス）中級・の計100名が週3回・各2時間（外にLL1時間）同センターで勉強しています。こうした基本コースの外に短期入門コースもあり、これらを（社）日本外交協会の派遣専門家を中

心に、大学の日本語専攻卒業生およびセンター講座の修了生から養成された教師たちが支えています。教師については他機関でも同様で、ボランティアベースの日本人と日本語専攻卒業生とが様々な問題を抱えつつも国際交流基金の研修や教材援助等を頼りに日本語教育を支えています。3年前にはキルギス日本語教師会も結成され、研究会はもとより弁論大会の実施（前述の外にも中央アジア日本語弁論大会が毎年開かれる）等様々な活動を行うようになりました。



キルギス日本センター日本語講座の社会人学習者達（いちばん奥左が筆者）

「でもどうしてそんなに日本語を？」きまって聞かれる第二の質問です。列举すれば、独立以来のA・アカーエフ大統領の親日的な方針、ODAドナー国一位の援助実績、中央アジアに対する日本の経済進出への期待感、“兄弟”的な親近感（父祖の地エニセイ川から東へ行ったのが日本人で西へ向かったのがキルギス人だとはよく語られる話）等々……。翻って私たち日本人は、彼の地の熱い思いに応えられるのでしょうか。

注1：モスクワ日本語教師会主催。ロシアおよび、旧ソ連の崩壊に伴い独立した国々の大学生による。2000年で13回を重ねた。

注2：国際交流基金主催、日本語成績優秀者研修に参加。

# 教材紹介

『みんなの日本語初級 初級で読めるトピック25』  
『みんなの日本語初級 書いて覚える文型練習帳』



『みんなの日本語初級 初級で読めるトピック25』 初級レベルの学習者が読んで楽しめる教材

(財)海外技術者研修協会 非常勤講師 牧野昭子

誰でも、本を読みはじめたら、おもしろくてやめられないという経験があるはず。日本語の読解教材にも、読む楽しさ、おもしろさを狙ったものが欲しいというのが本書を制作した動機です。できるだけ多くの学習者が楽しめるように、さまざまな話題や形式を集めるとともに、読むことに慣れ、読む力を伸ばすことを目指し、内容にあったタスクも付けました。

本書は、文字に慣れ簡単な情報をつかむ練習のための「ウォーミングアップ」、内容を理解しながら読むための「本文」、楽しむための「プラスアルファ」の3つの柱で構成されています。文法項目の提出順は『みんなの日本語』に対応していますが、他の教科書を使っている学習者も十分使えます。

使い方は、独習、クラスで使うなど、場合によって違ってきますが、ここでは教室で使う際のヒントをいくつか上げてみます。

まずオーソドックスに「本文」を読解の授業に使う場合は、その課の話題に関連した軽い雑談などで方向付けをしてから読む作業に入ります。未習のことばは語彙訳(5カ国語訳付き)を参照しながら読み、それから、「問題」をします。どのくらい読めているか質問をして、確かめてみてよいでしょう。ここで要求されるのは精読ではありませんから、「問題」がこなせる程度に読めていたらいいのです。そのあと音読で読み方を確認し、「問題」で間違ったところなどを確かめます。時間に余裕がある場合は、クラス活動のタスクがありますから、それを参考に「話す」「書く」などのいろいろな活動ができます。また、「プラスアルファ」は早く読めてしまった人にさせたり、クラス全員で楽しんだり、あるいは宿題にしてもいいでしょう。

“読む”ためだけでなく、本書はさまざまな使い方ができます。上記のクラス活動のタスクを参考に意見発表やインタビューなどの“話す”活動、作文などの“書く”活動、アンケートや資料などを材料に使う“プロジェクトワーク”などもできます。初級後半の学習者にも速読用、あるいは復習教材としても活用できます

本書はいわばいろいろな料理に使える豊富な素材が詰まった缶詰として利用していただきたいと思っています。味付けは使う教師の腕次第...ですが、そのまま食べてもおいしいことは確かです。

\* 綴じ込みの別冊「教師用ガイド」には、使い方・応用発展のヒントがいろいろ載っています。

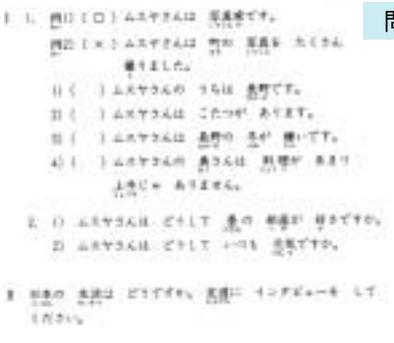
\* 「初級」準拠の本書の続編も刊行予定です。

さらに豊富なトピックをお届けします。

## 本文



## 問題



### トピック一覧

- お国はどこですか
- ジュースをお願いします
- こうべまでいくらですか
- いつ行きますか
- 何時の飛行機で?
- お花見
- もらいました・あげました
- 町の生活・山の生活
- 日本が好きです
- 美術館
- 高校生3,958人に聞きました
- 沖縄旅行

- 宝くじ
- ビデオレター
- 「頑張るタイム」
- 想像の動物
- 江戸時代
- 団体旅行? 個人旅行?
- 相撲
- 小説家の一生
- 雨降って、地固まる
- テレビ放送
- コーヒーを飲むと
- 日本語でお願いします
- 将来は...

みんなの日本語初級  
初級で読めるトピック 25

B 5 判 65頁 1,400円  
牧野昭子・沢田幸子・重川明美  
田中よね・水野マリ子著



みんなの日本語初級  
書いて覚える文型練習帳

B 5 判 143頁 1,300円  
平井悦子・三輪さち子著



『みんなの日本語初級 書いて覚える文型練習帳』 書いて学習項目の整理・定着を図る教材

日本語講師 平井悦子 日本語講師 三輪さち子

本書は、学習者が学習の初期から正しく書くことによって、文末の省略・助詞の省略・あいまいな表現などの不正確さを克服することが必要だと考え制作しました。語彙や助詞の整理・動詞の活用などの基本的な練習をはじめ、その課で学習した文型を使って書いたり、自分について書く短文まで幅広く取り上げています。本書は“書く”技能を伸ばすためではありますが、ご使用の際には、しっかり口頭で練習させた後に書かせる、という点に配慮してください。以下にクラスでの使い方と宿題として出すもの一例をご紹介します。

クラスでの使い方(14課)

動詞のグループ分け

動詞の文字カード・絵カードで「～ます」の前の音の違いに気づかせる。

- ・ ・ グループの違いを学生に言わせる。
- ・ iます eます \*iます します・きます

文字カード・絵カードを用いグループ分けをする。

学生に渡し、学生達にグループ分けさせてもよい。

本書62頁の「動詞グループ分け資料」を開き、確認させる。

本書63頁「動詞グループ分け」に記入させる。

学生をペアやグループに分け、確かめ合いながらさせてもよい。

学生に発表させる。

- ・ ・ グループごとに確認する。

特に グループ\*(起きます/見ます/借ります/います)が正しくグループ分け出来たかを確認する。



宿題としての使い方(20課)

クラスで動詞文・形容詞文・名詞文の普通体を学生から引き出し確認する。

例 T:今朝(「起きる」の絵カードを見せながら)

S:今朝7時半に起きた。

本書106頁「日記」を開き、「絵日記」を口頭で練習する。

記入させる。

クラスで発表し、確認する。

本書106頁、「日記を書きましょう」を宿題にする。

教師は回収後、助詞・表記などに注意して訂正し、返却する。



**お知らせ INFORMATION**

皆様からの投稿や各コラムへのご質問、ご意見等をお待ちしております。採用させて頂いた方には粗品を進呈いたします。  
本誌をご希望の方は、お名前、ご住所、所属をFAX等で編集室までお知らせください。無料でお届けします（国内のみとさせていただきます）。  
『Ja-Net』第17号は2001年4月25日発行です。

**セミナー SEMINARS**

**初心者のための**  
『みんなの日本語初級』の教え方  
昨年11月に小社で開講、好評だった『みんなの日本語初級』の教え方講座を今年も開講いたします。今回は前回に加えての方も開講いたします。これから日本語を教えてみたい方、教え始めたばかりでどうしたらいいか考えている方、お気軽にご参加下さい。

日程：2月5日(月) 7日(水) 9日(金)  
14日(水) 16日(金)

時間：昼クラス『みんなの日本語初級』  
/14:00~16:00  
夜クラス『みんなの日本語初級』  
/18:30~20:30

講師：飯塚達雄(スリーエーネットワーク 日本語講師)  
会場：小社教室(東京都千代田区神保町)  
定員：10名 費用：15,000円  
問合せ/申込み：スリーエーネットワーク講座係  
TEL:03-3292-6410 FAX:03-3292-6197  
E-mail: ja-net@3anet.co.jp  
講座案内をご請求下さい。

『みんなの日本語初級』を使った初級日本語の教え方

福井、京都、兵庫の日本語教育機関のご協力を得てセミナーを開催することになりました。周辺教材を活用しながら、どのように効果的に教えた方がいいのか、参加者の皆様と一緒に考えたいと思います。

**ほん BOOKS**

みんなの日本語初級  
携帯用絵教材 発売中 6,000円  
初級で読めるトピック25 発売中 1,400円  
書いて覚える文型練習帳 発売中 1,300円

みんなの日本語初級  
翻訳・文法解説タイ語版 発売中 2,000円  
翻訳・文法解説インドネシア語版 2月発売予定 2,000円

新しい日本語学入門—ことばのしくみを考える— 2月発売予定 1,800円

日本語についてより深く考えたい人のための日本語学入門書。日本語の文法はもとより、音声、そして方言といった社会言語学的な分野にまでわたって、最新の研究成果を取り入れながらわかりやすく解説した本です。庵功雄著。

韓国語レッスン初級 3月発売予定 2,400円

韓国語レッスン初級 カセットテープ 3月発売予定 3,200円

初級で一番支持されている日本語教材『みんなの日本語』と同じ文型積み上げ方式で学べる韓国語の教科書で、『韓国語レッスン 初級』の続編です。この教科書を終えると、日常生活の基本場面で実践的な会話ができるようになります。金東漢・張銀英著。

絵でわかるかんたんかんじ80(仮題) 3月発売予定 1,300円

小学1年生の教育漢字80字を絵で楽しく学習するワークブック。漢字の意味を絵で理解し、その後読み、書きとステップを踏んで学べます。親しみやすいイラストが満載の待望の教材、いよいよ発刊。武蔵野市帰国・外国人教育相談室 教材開発グループ編著。

福井  
日時：3月10日(土) 13:00~17:00  
講師：鶴尾能子(スリーエーネットワーク 日本語講師)  
会場：福井県国際交流会館2F 研修室2  
定員：40人  
申込締切：3月3日(土)  
参加費：無料  
問合せ/申込み：  
(財)福井県国際交流会 業務課 高嶋  
〒910-0004 福井市宝永3丁目1-1  
TEL:0776-28-8800 FAX:0776-28-8818  
郵便またはTEL、FAXでお申し込みください。

参加費：無料  
主催：兵庫日本語ボランティアネットワーク・  
(財)兵庫県国際交流協会  
申込締切：3月19日(月)  
問合せ/申込み：  
(財)兵庫県国際交流協会(協力課 栗林)  
〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通1-5-1  
IHDセンター2F  
FAX:078-230-3280 (TEL:078-230-3260)  
E-mail: icd@net.hyogo-ip.or.jp  
郵便またはFAX、E-MAILでお申し込みください。

京都  
日時：3月11日(日) 10:30~12:30  
講師：鶴尾能子(スリーエーネットワーク 日本語講師)  
会場：京都府国際センター会議室(京都駅ビル9F)  
定員：50名(申込み先着順)  
対象：登録ボランティア(2月申込受付)  
参加費：無料  
問合せ/申込み：(財)京都府国際センター  
〒600-8216  
京都市下京区烏丸通塩小路下ル京都駅ビル9F  
TEL:075-342-5000 FAX:075-342-5050  
E-mail: kyotopic@mail.joho-kyoto.or.jp

『新日本語の中級』山台セミナー  
『新日本語の基礎』に続く中級テキスト  
『新日本語の中級』が昨秋刊行されました。制作関係者による教材説明会を下記の通り開催いたします。

日時：3月18日(日) /14:00~16:00  
講師：春原憲一郎(財)海外技術者研修協会)  
会場：仙台国際センター/TEL:022-265-2211  
定員：100名(定員になり次第締め切ります)  
申込締切：3月9日(金)  
問合せ/申込み：スリーエーネットワーク講座係  
TEL:03-3292-6410 FAX:03-3292-6197  
E-mail: ja-net@3anet.co.jp

兵庫  
日時：3月24日(土) 13:30~16:30  
講師：田中よね(教科書執筆協力者)  
会場：ひょうご国際プラザ3F 交流ホール  
定員：100名(定員になり次第締め切ります)

主催：NPO法人ICAS  
(国際都市仙台を支える市民の会)  
後援：宮城県国際交流協会  
仙台国際交流協会  
協力：スリーエーネットワーク

**Ja-Net 季刊ジャネット No.16**

スリーエーネットワークという社名は、アジア(Asia)、アフリカ(Africa)、ラテン・アメリカ(Latin America)のいわゆる発展途上国の多くが存在する3つの地域をネットワークでつなぎ、相互理解と友好の促進を図ろうという趣旨をシンボライズしています。

2001年1月25日発行  
発行人 小川 巖  
発行所 (株)スリーエーネットワーク  
〒101-0064 東京都千代田区猿樂町2-6-3 松栄ビル  
Ja-Net編集室 TEL 03-3292-6410 FAX 03-3292-6197  
営業課 TEL 03-3292-5751 FAX 03-3292-5754  
http://www.3anet.co.jp E-mail: ja-net@3anet.co.jp  
日本印刷(株)  
© 2001 by 3A Corporation Printed in Japan (禁無断転載)